

名古屋が生んだ日本最初の理学博士

りがくはくし

伊藤 圭介

いとう けいすけ

伊藤圭介は享和3年（1803）に現在の名古屋市中区呉服町で生まれました。

いとうけいすけ

きょうわ

せんはつびやくさんねん

「ふくちよう

18歳にして医師となり、その後京都に出て蘭学や本草学を学びます。24歳のと

いし

らんがく

ほんぞうがく

24歳のと

き、伊藤圭介の本草学の師である水谷豊文らとともに、名古屋の熱田の宮にて、江戸

いとうけいすけ

ほんぞうがく

し

みずたにほうぶん

あつた

みや

えど

参府途中のシーボルトに会い、いろいろ教えを受けます。これがきっかけとなって

翌年の文政10年（1827）単身長崎に遊学し、シーボルトのもとで学ぶとと

よくねん

ぶんせい

せんはつびやくにじゅうななねん

ながさき

ゆうがく

もに、鳴滝塾の生徒たちとも交流を深めました。また、長崎を去るにあたりシー

なるたきじゆく

ながさき

ボルトより譲り受けたツユンベリーの『フロラ・ヤポニカ』を訳述し、翌年
たいせいほんぞうめいそ 『泰西本草名疏』として刊行します。これは西洋の植物分類を初めて紹介するも
かんこう ので、この中で「おしべ・めしべ」など現在でも親しまれ使用されている言葉をつ
やくじゆつ くりました。

その後伊藤圭介の名は知名度を増し、医者として本草学者としてだけでなく、蘭
いとうけいすけ 学者としても活躍することになります。天保元年（一八四一）、『イギリス国
がくしや 種痘奇書』、嘉永元年（一八四八）『乍川紀事詩』、安政元年（一八五四）
ばんぼうそうしよしやうせきへん 『萬宝叢書硝石篇』などを刊行するとともに、種痘の普及や国防問題など様々な
ぎやうせき 面に業績を残します。これらの業績が認められ、文久二年（一八六二）江戸
ばんしよしじゆへしよ 幕府より呼ばれ「蕃書調所」に勤務することになり東京での生活が始まります。
ふたた 一度名古屋に戻りますが、再び明治政府に招かれ文部省、小石川植物園などのめ

まぐるしく変わる組織の中で『日本産物志』や『日本植物図説』の編纂にも取り組みます。明治10年（1877）には東京大学理学部員外教授となり、『小石川植物園草木目録』の刊行を始め、東京学士院雑誌など多くの執筆活動を続けます。

明治21年にはわが国最初の理学博士の称号をもらい、明治32年には明治12傑の一人にも選ばれました。明治34年にこの世を去ることになりましたが東京大学名誉教授の称号と正四位勲三等、男爵の位が授与されました。

東山植物園には伊藤圭介の遺族の方より寄贈された多数の蔵書類が「伊藤圭介記念室」に保存されています。特に日記については「圭介文書研究会」のメンバーにより逐次解読され現在第12集まで刊行されています。

（東山植物園 横山 進）

※この記事は、発行者の許可を得て、『ひがしやま』創刊号2007夏

(東山公園協会 平成19年7月30日発行)より転載させていただ
きました。この記事の内容は、発行年時点のもので、最後の行で

紹介されている『伊藤圭介日記』は、その後も解読が進み、2014
年1月には、第19集が東山植物園から発行されています。